
狐が笑う

百千鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐が笑う

【コード】

N8510G

【作者名】

百千鳥

【あらすじ】

春の終わりは雨が降る如く胸を打つ物。

（前書き）

時代小説と決め込んでいますが、まだまだ拙い文章で至らない所があるかと思えます。軽い気持ちで読んで頂けると嬉しいです。

はらりはらはら、何故だろう花の散り際を雨と見間違つのは。そう
思い、縁側からぶらりと投げ出した足を揺らす。風を切り冷たい感
覚が指先を襲う。見つめてみれば、幾分か痩せ細つた真つ白な足が
並んでいた。そうだ、もう何週間も家から出掛けた例がない。それ
も毎日やって来るお手伝いさんに言われるがまま、部屋に閉じ籠つ
ていたものの。いい加減この体は何か遠い物に蝕まれている気がし
てならなかった。

嗚呼、実に退屈だ。そんな言葉を口にすると、庭先で風に揺れる木
々の葉が笑う。視界は日に日に霞んで行くばかり。否、そう思い込
んでいるだけかもしれない。

この見慣れた全ての景色に包まれた生活の中で、確実に体の不調
を訴えるのは長男である僕だけだ。弟など毎朝、刀の稽古に行く
と元気良くこの家を飛び出す。仕方なく、僕は帯に挟んでいた煙管に
手を掛けた。体が不調だと言いながら、煙を欲してしまうのは一度
踏み込んでしまった故の罰なのかもしれない。皮肉めいた言葉に口
の端を吊り上げながら、傍らに置かれた煙管盆に手を伸ばす。何と
も言えない触り心地の刻まれた葉は指で丸めながらも、指紋に残る
ようにで氣持が悪い。

その時、すり足で近寄る音に火を灯す前に溜息が出てしまった。

「志郎さん、その様な所でまた煙草ですか？お薬をお持ちしました
が…」

少し気まずそうに志郎の隣へ寄ってきた、この家のお手伝いをする

千代はマッチの炎が刻まれた葉に燃え移る様を困ったように見つめていた。千代は今年新しく志郎の父が雇った女で、代々医者を務めるこの家の跡取りである四郎に仕えるようになった。歳もまだまだ若く、弟と同じくらい。だからなのだろう、仕事が休みの日は弟と良く話に花を咲かせている。

それはそれで良いのだが、医者を目指しながら、薬を飲もうとする体が拒否反応を起こすのはどうした物か。見るだけで口の中がすっぱくなって行く。その酸味を解消させるように、志郎は口に含んだ煙を肺に忍ばせると、ほっと安心したかのように一気に吐き出した。真っ白な煙が無色透明な空気の中に溶け込んでいく。一口、そしてまた一口肺に忍ばせては吐き出すの繰り返し。やがて、煙管の先からすこすここと手応えの無い味が口へと届いた。

もう終わりか、寂しそうな言葉が志郎の口から小さく聞こえる。一時のこの時間を、何よりも楽しんでいるのだが。このあっさりとした感覚は、いつもの事ながら寂しく思った。

「さて、薬でも飲もうか」

「そうして下さい、旦那様もご心配されておりましたので…志郎さんには早く良くなって頂かないと」

「分っているよ、分っている…分っているんだ」

千代の言葉が建て前だと言う事は見て直ぐ理解する。だとしても、ここで彼女に当たる事も無い。彼女はただ、雇われの身で言われた

事をしているだけなのだから。

千代は志郎が薬を飲む様子をじっと、真剣な瞳で見つめる。髪に刺さる簪が視界に入ろうと、それには目もくれずに。いつも浮かべる優しく柔らかい笑顔の欠片などどこにも無い。見えない所で吐き出そうとしないように見張っているのだろう。

何とも言えない苦味を帯びた薬を水で流し込むと、志郎は意から込み上げてくる不快感に口元を覆い俯いた。息が詰まり、言葉さえも発する事が出来ず。体はただ縁側の冷たい床に吸い込まれて行く。だから薬は嫌いなんだ、体を良くする物だと言いながらも、味も悪く体が何度も吐き出そうとする。だがここで吐き出されれば、また同じ事を繰り返さなければならぬのだから達が悪い。

暫くその苦痛に耐える体は、何度か咳き込む事で次第に落ち着きを取り戻して行く。寝そべった景色は実に不思議で、普段足を着ける場所なのだと思えないほど身近な物になっていた。例えるなら、先程見つめていた庭だ。思いもしない所で、心が安堵するのは目の先にあるからなのだろう。寝そべるなどはしたないと言われる家で、その禁を犯すのは実に愉快だ。

「相も変わらず…薬は不味いな」

千代の姿を反対に、誰の足も見えない床を縦に見つめながら志郎はぼんやりとした様子でそう口にした。綺麗に磨かれた狐色の床は庭先の、散り行く桜の影を映した。はらり、はらはら薄桃色の終わり。

嗚呼、雨が降る。心にも冷たく沁み込む様に。

志郎の上下する胸が落ち着きだすと、傍らの千代は目を伏せて桃色の唇をそつと開く。

知っていますか？この土地に住む鬼を。

少し低く擦れた声で千代が話し掛けて来たので、志郎は頷く事で返事を返した。いつもなら薬を飲み終われば退室する彼女が、今日に限って珍しくここに留まっている。今まで確信も無く目を逸らす事で一日をやり過ごして来た志郎だったが、千代のこの言葉で何か合点が行ったのだ。この家に生まれて、ここ最近感じ出したものに。

気付くまい、気付くまい、例え全てが歪んでいたとしても。この命終わるまで確信する事は無い。そう仕切りなしに胸を叩く言葉と共に、おぼろげな記憶がのんびりと頭の中を駆け巡って行く。

昔から、父親とは上手く行かない。否、上手く行つた例が無い。言葉など交わさなくともその視線、その威圧感、その雰囲気。志郎と言つ一つの存在全てを否定するかの如く、過ごして来た生活。家を出ようと何度思った事だろう、代わりなら弟がしてくれるのだからだがしかし、その弟も医者の仕事に興味を示す事も無く争いの為に稽古に向く始末。父親から受け継いだ強い使命感のお陰で、こうしてこの家に留まって居る。

「とても恐ろしい鬼、で御座いますね…あの方は」

淡々として聞こえてくる声に、志郎の意識が引き戻される。しんと静まり返った事で、風の音が良く耳に入るようになった。どこから聞こえるのか、寺の鳴らす鐘の音が小さく聞こえた気がした。志郎は勢い良く体を起き上がらせると、悲しそうにも見える千代を見つめて静かに口を開く。

「そろそろこの毒にも飽きた…明日からは別のを持ってきて欲しい」

千代は大変驚いたらしく、目を丸くさせながら口を覆った。

そう、幼少の頃より体に良いからと飲まされる薬には恐らく毒が紛れ込んでいただろう。それも少しづつ体に馴染ませるように。これが確信。気付きたくないと思い続けていた志郎の心は、今にも崩れ落ちそうな程絶望の底に落とされる。

「何てね、嘘だよ…鬼も居れば、狐も居る。実におかしな家だな」

「志郎さん、私は…：旦那様に言われて…：」

今にも泣きそうな表情で、焦りを露にする千代。

だが、そんな事を言っていないながら弟にこの家を継がせたいのは同じだろう。恋仲なのだ、誰がどう見てもそう思う。この家に仕事を求めに来るのは、家が貧しい者が多い。そんな境遇の娘が、将来を約束された男と恋に落ちる事が出来た。鬼に脅されたとは言え、躊躇

いは無かったに違いない。

そう思えば、この可愛らしい顔もどんどん憎く見えてきてしまう。

「長く無駄な時間を過ごした」

溜息混じりに今後の事を考えようとした瞬間、志郎の体は不自由となり床に叩きつけられる。

何が起きたのか、それを確認する事でさえ思考が追いつかない。見上げた千代はただただ淡々とした表情でこちらを見下ろしているばかり。

体が思った以上に痛んでいるらしい。それを知ったのは、激しく痛みを孕んだ胸のせいだ。

しんと、降りしきる雨のような花弁をこれ程惜しいと思った日は無い。ごろりと体制を整えて、庭の桜を見つめると今まで溜め込んでいた涙なのか、ぽろぽろと頬を流れ落ちた。それはとても温かく、母に抱かれた記憶を呼び覚ます。

「春終わる散り行く姿雨に似て母よこの手を引いてくれぬか」

痛みに耐える体は、今は亡き母親の心境を知るようどこかもの寂しい。

何度も悶えながらも表情は無い志郎の痩せ細った手を握りながら、千代は優しく笑みを浮かべた。まるで、言葉に言う花笑みの如くそれはもう鮮やかに。

(後書き)

季節外れのお話ですが、短歌なども文中に混ぜて見様と言う初の試みでしたのですが如何だったでしょうか。心に残る等贅沢は言いません、少しでも楽しんで貰えたならそれだけで光栄に御座います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8510g/>

狐が笑う

2010年12月25日02時09分発行